

兼田麗子著

『福祉実践にかけた先駆者たち』

——留岡幸助と大原孫三郎』

評者：室田 保夫

1

近年、社会事業家の評伝を集めた「シリーズ福祉に生きる」（大空社）をはじめ、近代日本の社会事業家の事業（実践）と思想に光をあてていく著書がかなり出ている。またこの時、鈴木眞理子『福祉に生きた女性先駆者』（草の根出版会、2004）がF. ナイチンゲールとJ. アダムスの二人をあげて論じるように、「福祉」の名の下に一見、意表をつく人物が比較されたりすることもある。かかる状況は社会福祉が一つの変革の時代を迎え反省的考察を必要としている証左かもしれない。ここで紹介する兼田氏の著作のサブタイトルにもあがっている「留岡幸助と大原孫三郎」という組み合わせも一種の意表をつくものである。留岡となら同じキリスト教社会事業家として山室軍平や石井十次との比較、一方、大原なら博愛事業として渋沢栄一との比較、あるいは石井十次と共に論じていくようなことが一般的には想起されるだろう。この社会事業家の典型留岡と実業家大原の組み合わせというところに著者の重要な視点と上梓への想い（戦略）がある。さて何故、留岡と大原なのか。また「福祉実践」という言葉は最近よく使われることがある。この時、社会福祉実践でなく福祉実践であることは如何なる相違があるのか。

こうした疑問がまず生じるが、それには筆者兼田氏について少しみておく必要がある。

氏については奥付の著者紹介の中でつぎのように記されている。著者は1964年生まれ、政治・社会思想専攻で、現在（著書刊行当時）早稲田大学大学院博士後期課程在学中。修士論文は「21世紀の日本の高齢者福祉—健康価値論からみたNPOの役割、あるNPOの事例研究を中心にして」である。論者はこの論文については未見で内容については不明であるけれども、社会福祉史というよりは政治思想学会や経済社会学会の所属であるように、社会福祉に限定せず、NPO活動等、時宜に合った問題を広い視点で見られるようである。「福祉」という概念も広義の謂であろうし、かつ氏も著書の中で明確な定義が示されているわけではない。著書は358頁からなり、留岡を論じた第1部と大原を論じた第2部とに大きく分かれている。もちろん全体を読んだ中で二人の比較を取り上げた意味（共通点のみならず相違点も）を考えなければならぬことはいうまでもない。著書の内容は早稲田大学大学院社会科学研究所の紀要論文が基になっており、参考文献や年表、そして索引が付されており、研究書と理解できる。

2

さしあたり上梓のモチーフが表現されている「はしがき」を見てみよう。既述したように筆者の研究の出発点はNPOや現代の福祉政策論であるが、歴史研究をやる目的を「民間活力溢れる市民福祉社会づくりに必要な視点を過去から洞察しようと考えた」（2頁）とある。現代と同様に「意識や社会構造が変化し、閉塞感や危機感の充満する変革の時代」において、「フィランソロピー精神の下で、問題点を進んで改良しようとした先駆的な社会福祉実践者の思想と実際の活動を現代的意義を求めながら考察することにした」という基本的な姿勢を述べてい

る（2～3頁）。そしてかかる実践家は数多い中でその典型が留岡と大原の二人であったということである。また社会事業家と実業家の二人を切り結ぶキーワードとして「フィランソロピー精神，民間人としてのリーダーシップ，体系的な実践，創意工夫，経済や現実に対する合理的視点，個人も重視する姿勢，私益偏重や功利主義的でない，心・精神・道徳と学術・経済・物質・科学の両立」（3頁）等であると述べられている。

ところで我々が歴史研究をしていく時，大別して二つの大きなアプローチ方法があろう。その一つは過去の事実を実証的に研究し真実像を見極めていくことである。歴史研究の多くは，その方法論がいかにあれ，この事実の究明という目的にあると思われる。もう一つは，既成の歴史研究の成果を取り上げて新しい視点で切り込んでいくことである。つまりその研究に新しい息吹を吹き込むことによってもう一度，今に蘇らせることにある。歴史が常に「現代史」と言われる所以でもある。ここで取り上げる兼田氏の著作はその意味で，新しい視点にたち，筆者の問題意識から新しく切り込み，そして従来と違う側面から光をあてることを方法（目的）とされたものであろう。

しかし過去の研究蓄積から学びながら現代的課題へのヒントが主なる目的となり，過去の時代に対する慎重かつオリジナルな考察が充分なされないと，歴史的考察の下で「非歴史的」となる。そして往々に綿密な従来に対する論議も二義的な意味しか持ち得なくなる。例えば留岡研究に関する感化（教護）と治安，犯罪（監獄）と監視，地方改良運動における内務省との関係（部落問題を含めて），あるいは北海道社名淵分校（感化農場）における実践を巡っての議論への言及についてである。兼田氏の場

合かかる課題は本質的な問題として論じられていない。過去の典型的な先学の主なる研究評価（研究史）が紹介されるが，その課題探求への深化にはあまりウエイトが置かれない。つまりその議論について留岡のこれまでの相反する評価，議論はどうすればいいのかの疑問は残されたままである。

3

本論に移ろう。留岡の歴史的な叙述は第1章の「社会事業を本格的に志すまで」（21～34頁）に論じてある。第2章「『民』の立場での実践例—巢鴨家庭学校」（35～56頁），第3章「『官』の立場での活動—報徳思想と地方改良運動」（57～94頁），第4章「北海道家庭学校とオウエンのニュー・ハーモニー」（95～129頁），付論として「留岡幸助と法律関係者との交流」（131～148頁）があり，小河滋次郎や牧野英一ら法学関係者が取りあげられている。この留岡のパートでの骨子は2，3章の「民」と「官」の両方に関わった留岡の評価であり，さらにその総決算としての北海道での事業についてである。総体として「『明治国家危ふし』という認識が一般的だった時代の問題意識を尺度にすれば，幸助を高く評価しても構わないのではないだろうか」（84頁）という表現が著者のモチーフを端的に表していると言ってよい。しかしこの時「問題意識を尺度」にすると，過去の危機の時代という特異性に限定されるが故のものなのであろうか。また，「官」と「民」そして「公」の関係の議論が欲しかった。

留岡という人物はその言説を読めば多くの矛盾するようなことを言っているし，時代の被拘束性も逃れがたくある。平たく言えば，正と負の両方を持ち合わせている人物でもある。これを一方から評価すると素晴らしく，又一方から評価するときわめてネガティブな人物像が出来る。つまり留岡についての評価は二分されてきた（拙著『留岡幸助の研究』序章，参照）。こ

の二つを総合的に評価することは至難の業でもあり、二者択一的な発想でなく違う視点から光を当てることが可能なのかどうか。もしそうならその方法論の提示の必要性。社会事業の思想を如何に評価していくか、これはアポリアとしてあるが、その時、現代的課題という視点で風穴をあけるには重々納得いく実証性も必要ではないか。でないと評論に傾斜していくだろう。

また幾つかの叙述に疑問点もある。例えば筆者は「監獄制度を研究するために欧米各国へ遊学した者は政府関係者にも民間にもいなかった時期」(27頁)や「幸助は、自由・民主的側面を重視したからこそ自己の内からの改革を繰り返し主張した」(83頁)といった表現。前者には留岡以前において、明治初期から監獄制度を視察した官僚等はいるし、後者の「自由・民主的」という表現は留岡の思想の中核とするならそれだけの論証が欲しい。

さらに留岡がキリスト教を基軸に西洋的な思想傾斜への評価をしながら、一方で報徳や儒教思想の評価がみられる点等、戸惑いも覚える。また北海道家庭学校とオウエンとの比較研究も、時代と文化的相違をふまえて、その根拠、論証の緻密さが望まれる。そしてこれは次の大原にも通じるが天皇制や国家との関係についての論証が欲しかった。現代的課題の公共性(公共哲学)といった議論が入るなら、なおさら日本近代国家の特異性についての言及が留岡や大原研究については必要ではなからうか。

第二部の大原であるが、5章「大原孫三郎」(149～172頁)、6章「倉敷紡績内での改革と大原社会問題研究所」(173～190頁)、7章「労働科学と倉敷労働科学研究所」(191～233頁)までは大原の事績や思想が中心に論じられ、8章と9章において「大原孫三郎と温情主義の武藤山治」(236～265頁)と「大原孫三郎と儒教的人道主義の渋沢栄一」(267～302頁)とあるよ

うに比較を通して大原の独自性を浮かびあがらせる。

大原に関する研究書は従来の『大原孫三郎伝』(中央公論事業出版、1983)等があったが、近年、高橋彦博『戦間期日本の社会研究センター』(柏書房、2001)、大津寄勝典『大原孫三郎の経営展開と社会貢献』(日本図書センター、2004)といった研究書が刊行され、彼の業績についても多角的に再評価されている。兼田氏も大原は「人格向上主義に立って企業経営と社会貢献を行った人物」(152頁)として評価されているが、もちろんこうした評価は大原についてはこれまでに論じられてきたことでもある。ただ、こと社会福祉史からは大原その個人の思想というより、主に石井十次との関連で論じられることが多い。この著において兼田氏の大原への評価は武藤山治や渋沢栄一といった近い人物との比較において、「キリスト教人道主義」「市民社会的要素」「民主・平等的な視点を重視」「民間から指導力の発揮」(287～288頁)といった面からもその評価は高く、いわば理想的人物としての感もする。また大原の活動や思想は「下」からの発想が強く、その社会事業は「人間の不幸を処理するだけに留まらず、福祉・幸福を高めていこうとするポジティブなものであった」(290頁)とし、渋沢のネガティブ性と対象的に評価され、「人間の尊厳を促進する経済政策」(同頁)を主張した息子総一郎に引き継がれたときわめて高く評価されるのである。

さらに「あとがき」においても「私の根本的な問題意識の概略は、経済効率性と同様に、非物質的な人間性をも認めていく方向性の模索である。市場原理と非市場原理、経済性と人間性の調和という、そのような問題意識に基づいて、国や地方自治体による社会政策も発達してきた現代の枠組みの中における民間人の公共福祉への貢献可能性について歴史に指針を求めたもの

が本書である」(330頁)と述べられている。まさに大原と留岡は閉塞した福祉状況を打開するに多くのヒントを提供してくれる人物となる。しかし時代を超越した共通の問題意識という認識を強調し、ネガティブなものを捨象し著者の価値観によりポジティブなものを評価していくことは歴史の安易な裁断にならないか。過去のその時代の中で、ポジティブなものとの相克の中で、可能性を見出していくことが重要ではないか。

4

留岡も大原も「東洋的側面と西洋的側面を融合させた特徴を有していた」(331頁)、「本書は、それらの東洋的要素と西洋的要素を改めて融合することの可能性に光を当てて、フィランソロピー精神と人類愛に基づいた民間力を日本で鼓舞したいという意図をもって執筆したつもりである」(331頁)と論じられているように過去の人物に光を当てることによって現代的課題にながしかのヒントを得ようとする。そのモチーフは共感できるし、教えられたことも少なくない。「閉塞感や危機感が充満している現代社会の処方割りを割出す手がかりを得るためには、変革や危機感が同じように意識された過去において問題点を改良しようとした先駆者の思想と実際の活動を考察することが有効」(6頁)という「視点」に対して既述した疑問はあるが、基本的には共感する。そして現代が「変革の時」であり、福祉多元社会の志向が一般的であり、「公共性」、公私の「協働」、「ソーシャルガバナンスの意義」が問われる今、社会福祉の歩みを多角的に見ていくことの意味は重要である。ただこの時、余りにも問題意識が表に出すぎ、自己の評価の中に収斂させようとすると、過去の事実をも歪曲する危険性をもつ。ひいては歴史

上の真実をも曲げられていくことにもなりかねない。社会福祉はきわめて実践性を有していることは確かだし、政策もその有効性が問われる。しかし、安直に現代と過去を結びつけることについては充分慎むことも必要でもある。丸山真男の「思想史家の思想というものはどこまでも過去の思想の再創造の所産であります。言いかえるならば思想史家の抱負なり野心というものは歴史のなかに埋没するにはあまりに高慢であります」(武田清子編『思想史の方法と対象』25頁)という言葉が想起される。

最後に著者への期待を込めて一言。著者の問題意識にも繋がるが、日本の伝統意識、あるいは東洋思想への掘り起こしへの作業である。日本は近代化の過程で西洋を余りにも理念化(「脱亜入欧」)しすぎたことへの反省もある。日本の近代化過程における「東洋道徳と西洋芸術」(佐久間象山)や岡倉天心の「アジアは一つ」といった言葉を持ち出すまでもなく、我々は近代化(西洋化)によって失ったものも少なくはない。「あとがき」において触れられているように「儒教や儒教の公共性」「儒教や東洋の良い面」(332頁)への究明である。福祉国家の比較研究における「東洋モデル」という枠組みがあり、社会福祉思想史研究の中で、こうした伝統思想、東洋についての関心がないわけではないが、研究が少ないことは確かである。年表が1601年の近世から作成されているように、今後そのような研究の深化、実証的な研究を兼田氏に期待したい。

(兼田麗子著『福祉実践にかけた先駆者たち—留岡幸助と大原孫三郎』(藤原書店、2003年10月、358頁、定価3800円+税)

(むろた・やすお 関西学院大学社会学部教授)